

徳島県のカリフラワー産地振興活動調査

～カリフラワーの産地振興を考える～

後藤美奈子(東三河農業研究所(前・田原農業改良普及課))

【平成24年5月28日掲載】

【要約】

田原市は、愛知県を代表するカリフラワーの産地であるが、生産者の高齢化などにより栽培面積は減少傾向にある。そこで、全国有数のカリフラワー産地である徳島県における産地振興活動について調査した。田原市と比較して産地規模は大きいですが、生産状況や高齢化が進んでいるなど問題点において共通する点が多く、今後の産地振興を考える良い機会となった。

1 はじめに

田原市は、歴史、規模ともに愛知県を代表するカリフラワーの産地である。しかし、生産者の高齢化などにより、栽培面積は減少傾向にある。また、登録農薬が少ないため、病害虫防除にも苦勞している。そこで、全国有数のカリフラワー産地である徳島県における産地振興活動について調査した。

2 調査方法

徳島県におけるカリフラワー生産で、作付面積県内1位のJA徳島市、2位のJA板野郡を視察し、JA徳島市、JA板野郡の営農指導員から産地概要、生産及び出荷状況について聞き取り調査を行った。

3 結果

(1) 産地概要

◎ JA徳島市川内支所 (徳島県徳島市川内町)

第2種兼業が多い地域で、主要品目はサツマイモ、カリフラワー、レンコン、ダイコン等である。カリフラワーは水稻の裏作として作られており、ほとんどが家族労働力2名での経営である。生産者戸数90戸、作付面積は55haで、徳島県で最も大きいカリフラワー産地である。生産者の平均年齢は70歳代で、40歳代の若手生産者が5名いる。

◎ JA板野郡 (徳島県板野郡板野町)

主要品目は、ニンジン、レタス、レンコン等であり、カリフラワーは10番目前後の品目である。生産者戸数は38戸、作付面積は22haで、徳島県で2番目に大きなカリフラワー産地である。昔から女性や高齢者が営農の主力で、JA徳島市と同様、水稻の裏作で作付けされている。高齢化が進み、新規生産者が定着しないため生産者数は減少しているものの、一部農家の栽培面積の増加で産地の維持がなされている。

(2) 生産状況

◎ JA徳島市川内支所

一戸あたり作付面積は平均で約60a、最大では3ha程である。ほとんどが128穴セルトレイで育苗を行っており、夏期は露地、冬期はハウスを利用している。

出荷時期は9月中旬から6月中旬であり、二期作も行われている。1月から3月の出荷数量を増やすため、作付面積の少ない生産者にはその時期に収穫できる品種の作付けを誘導している。

根こぶ病に苦慮しており、発病を抑制するため、pH8まで土壌pHを高めることを指導している。今年には黒腐病が多く発生した。田原市と同様、登録農薬が少ないため、病虫害防除に苦慮している。



写真1 カリフラワーの生産ほ場

◎ J A板野郡

育苗は地床育苗が中心で、セルトレイ育苗はほとんどなく、定植機も2、3台しか導入されていない。出荷時期は、10月末から5月末で、3月から5月出荷が中心である。この地域でも根こぶ病に苦慮しているが、土壌pH7程度を基準にしている。

(3) 出荷状況

両地区とも6kg詰段ボール出荷であった。出荷先は京浜、中京、阪神などで、J A徳島市は、軽微な異常花蕾などは下物等級専用の箱で広島市場に出荷している。

4 まとめ(考察)

今回調査した徳島県のどちらの地域も作付面積、生産者数とも、田原市より大きい。しかし、高齢者や女性が生産の主力で、農薬登録が少ないこと、生産者数が減少していることは、共通する課題であった。品種選定についても、田原市と同様に力を入れていたが、主要品種や試験品種もほとんど同じであった。

出荷形態は、徳島県の両産地とも6kg詰段ボールが主体であった。田原市では現在8kg詰段ボールでの出荷を、全国主流の6kg詰段ボールへの変更を検討中であるため、段ボールの形態や出荷規格等を知ることができ、とても参考になった。

田原市は、他の露地野菜(キャベツ、ブロッコリー等)との組み合わせで栽培されている場合が多く、今後高齢化が進むと、手間がそれほどかからず、カリフラワーよりも出荷段



写真2 6kg詰の荷姿

ボールの重量が軽いブロッコリー(5kg箱)への移行が進むことが予想される。徳島県ではカリフラワーの出荷規格が6kgであることで、女性や高齢者でも労働負担が少なく出荷ができているということから考えると、田原市でも出荷規格を軽量化することは生産者数確保のための有効な手段と考えられる。